

インスラー写本から「タシロ聖杯様式」の動物組紐文へ
—文様の構成原理に見るノーサンブリア美術の影響—

東京藝術大学 吉田 泰子

インスラー写本は700年前後のノーサンブリアにおいて《リンディスファーンの書》や《ダーラム A.II.17番》に代表される成熟期を迎える。これに対してカロリング・ルネサンス前夜の大陸美術は、インスラー系の修道士の布教を機に、「インスラー美術の属州」(G. Haseloff)とも呼ばれる時期を迎えていた。なかでも《タシロの聖杯》(クレムスミュンスター修道院所蔵)と関連作例の、「タシロ聖杯様式」と呼ばれる動物文は、「大陸版のインスラー動物文」と評価されている。そこで本発表では、このノーサンブリア美術が8世紀の大陸美術に与えた影響について、動物組紐文の観点から考察を試みるものである。

インスラー写本の動物文は、民族移動期に展開した「ゲルマン第Ⅱ様式」(B. Salin)の基本形式を保つ《ダロウの書》の後を受けて、二系統に分化する。一方は脚の付け根の関節部に渦巻文を施しつつ、同時に「第Ⅱ様式」以来の頭部形態を残した《ダーラム A.II.17番》の系譜であり、片方は地中海美術の接触によって動物文頭部がより自然主義的に表された《リンディスファーンの書》の系譜である。先行研究の中でも特にハーゼロフは、細部の形態に着目し、「タシロ聖杯様式」の最大の特徴を関節部分の渦巻文に認め、その源流を《ダーラム A.II.17番》の系譜に求めた。

これに対して発表者は、文様形態の比較のみならず、その構成原理に関して考察を行うことで「タシロ聖杯様式」とノーサンブリア写本との関係に修正を加えることを試みた。ノーサンブリア写本の動物組紐文の構成は、詳細に観察するならば、《ダーラム A.II.17番》系統と《リンディスファーンの書》系統とに共通性が認められる。すなわち、動物のリボン状身体をギローシュのように縀り合わせることで組紐原理を体現している。また《タシロの聖杯》の文様には、《リンディスファーンの書》と同様に動物文頭部の自然主義的な造形も認めることができる。この点からすれば、「タシロ聖杯様式」に《リンディスファーンの書》の系統の影響を想定することも可能だろう。更に「タシロ聖杯様式」の文様は網状構造の点でノーサンブリア写本と共通するが、同時にそれらの写本ほどに緊密な構成を見せず、自由な戯れを志向している。また《タシロの聖杯》にはケルト=ゲルマン的動物文と並んで、地中海的な植物文を見ることができ、興味深いことに、動物的要素と植物的要素の混在する文様形態も認められるのである。こうした植物的文様の平行例は写本には残されていないものの、やはり他に先駆けてノーサンブリア系の金工や象牙彫り作例に見出される。以上の観察からすれば、「タシロ聖杯様式」の文様の展開には、北方的な動物組紐文を基盤としつつ、ノーサンブリア美術を介しての地中海美術の要素も認められると言えよう。